

教育効果の高い学校の7つの特徴について



夏季休業中に、児童生徒が「生活習慣の改善」や「学習習慣の定着」を意識しながら過ごせるよう、御指導いただいたことと思います。夏季休業中に、学力向上担当者が中心となり、児童生徒の笑顔のため2学期以降に全教職員で共通して取り組む内容を明確にしましょう。そのヒントとして、お茶の水女子大学 耳塚 寛明 教授の研究チームが示した、「教育効果の高い学校の7つの特徴とその具体例」を紹介します。耳塚教授は8月10日（水）の「おかやま教師力アップセミナー」で講演されます。ぜひセミナーにも御参加ください。

教育効果の高い学校とは？

平均正答率が高い学校を即「教育効果が高い学校」と見なすのではなく、学校が置かれた社会経済的背景から学力に課題が大きいと推計されるにも関わらず、より高い達成度を示している学校のこと。

※社会経済的背景（SES）とは、家庭所得、父親学歴、母親学歴を合成した指標のこと。

家庭学習の指導

- ・宿題＋自主学習の実施で児童生徒の主体性を育てている。
- ・提出→確認→評価→還元サイクルで児童生徒を励まし、自己評価、自己管理の力を高めている。

管理職のリーダーシップと同僚性の構築、実践的な教員研修

- ・教科をこえた研究授業を「見せ合い」「教え合う」ことを通じて同僚性を構築している。
- ・管理職の信念を通信等で小まめに教職員に伝えている。

小中連携教育の推進、異学年交流の重視

- ・9年間を見通した、教育内容の検討や授業規律、生活規律の共有等の小中連携を行っている。
- ・異学年交流や異学年学習を積極的に取り入れている。

言語に関する授業規律や学習規律の徹底

- ・書く、話す等、表現する活動を重視している。
- ・授業や学び方のルールを教室に掲示している。
- ・子どものノートが見やすく整理され、文字を丁寧に書いている。

都道府県・市レベルの学力・学習状況調査の積極的な活用

- ・自校の課題を明確にするために調査結果を有効に活用している。
- ・分析のための人員や委員会を置き校内で分析することに加え、小中合同の検討会を開いている。

基礎・基本の重視と少人数指導・少人数学級の効果

- ・全ての子どもに基礎・基本を徹底させている。
- ・習熟度でコースを分けても、課題・教材等は同一のものを使用し、課題に取り組む時間に変化を持たせている。

放課後や夏季休業中の補習

- ・教職員や学校が、児童生徒の学力向上に責任をもつという意識を持っている。

「なるほど！」と思った方は、ぜひ「おかやま教師力アップセミナー」へ。7月22日（金）が参加の1次締切です。同僚や友人と誘い合ってのご来場をお待ちしております。

お問い合わせは、各市町村教育委員会または、県教育庁義務教育課学力向上対策班（TEL086-226-7082）まで。

